

第 1回 イワレビコの出征・出立

- ・神武東征の全体行程
- ・イワレビコ誕生
- ・大和思慕
- ・御船出

中心出典:「海道東征」をゆく(産経新聞社)、「古事記」(竹田恒泰著、学研)
、「日本書紀」(宇治谷 孟著、講談社)
、「神武天皇の真実」(田中英道、扶桑社)

講師 井上正和

1. 神武東征の全体行程

日向から大和までの神武東征の行程は、イワレビコを歓待する平和裡な日向から浪速までの行程と浪速から熊野灘を経由して大和に至るまでの戦いの行程に2分できる。(参照資料1ー1)

- ①日向から浪速までの行程: イワレビコが国つ神に歓待される味方国の行軍
- ②浪速から熊野を経由する大和までの行程: イワレビコが敵対する国つ神を打ち負かしていく行軍

東征の目的から東征の決意まで

2. イワレビコ誕生

(1) 東征への想い

①八紘一字

昭和15年に皇紀2600年を記念して八紘一字の塔が建てられた。高さ36.4m。「八紘一字」の銘がある。平和の塔(宮崎市の高台 平和台公園)

- * 神武天皇が大和に橿原宮を造営した際の言葉(日本書紀)で、
「六合を兼ねて都を開き、八紘を掩(おほ)ひて宇(いえ)と為さむこと、亦可(よか)らずや」とある。
⇒意味は、「四方の国々を統合して都を開き、天下を覆って我が家とすることははなはだ
良いことではないか」という国造り宣言。
- * 平和台公園の平和の塔の四隅には神武の四面性を表す「荒魂」「和魂」「幸魂」「奇魂」が配されている。(参照資料1ー2)

②東征の目的

東征は軍事行動だけではなく、3つの文明・文化を伝播する旅。稲作と鉄器、そして灌漑技術。
⇒ゆかりの地で井戸を掘ったり、その技術の高さから分かる。

③東征の期間

古事記では16年間、書紀では6年間かかったとされる。

(2) イワレビコの生誕地(日向 皇子原(おうじばる))

- * 「天皇生まれながらにして明達(さか)しく、意かたくまします。」(日本書紀)とある。
- * 生誕地は皇子原(おうじばる)。隣接して狭野神社(さのじんじゃ)がある。
- * イワレビコの幼少名は「狭野尊(さのみこと)」

(3) 育った場所(高千穂峰東麓)

水稻の起源

- * 高千穂峰東麓(現在の高原町)で15歳まで過ごした。
- * 狭野一帯を稲作先進地と考える考古学的根拠がある。
 - ・都城市、えびの市、高原町周辺の遺跡では稲を収穫する石包丁や土器、こびりついたもみ殻、水田跡などが発見されている。⇒初期農作の痕跡。
 - ・大淀川の源流で水が豊富な狭野一帯では稲作が可能であった。
 - ・縄文時代に稲作の遺跡は南九州(日向)と北九州に集中している。
 - ⇒縄文時代の陸稲、弥生時代の水稲はDNA判定でジャポニカ米朝鮮経由ではない別ルートで伝わったと言われる。

(4) 吾平津媛(アヒラヒメ)との結婚と別離

- * 吾田(あた)村の吾平津媛(アヒラヒメ、アヒラツヒメ)を娶る。
 - ・アヒラヒメは神武天皇が狭野尊と称されたときの後
 - ・アタは薩摩半島西部で貝輪交易が盛んなところであった。
 - 貝輪とは沖縄周辺産の大型の貝から作る腕輪
- * 貝輪の流通は九州北部や瀬戸内海東部まで流通。⇒イワレビコは貝輪貿易で力を付けた？
 - ・油津港には吾平津(アヒラツ)神社があり、アヒラヒメが祭神。

アタにある高橋貝塚で盛んに製造されたことが発掘調査で確かめられた。参照資料1-3

(5) イワレビコの皇居

- * 皇宮神社
 - ・宮崎神宮から西北約600m先の丘にある。
 - 宮崎とは宮(皇宮)の崎(前)の意味か。(地名起源)
 - ・九州に下向してきた皇孫の建磐龍命がその縁に因んで創祀し、崇神天皇の時代に社殿が創建。
 - ・イワレビコは15歳になるとこの地に移り、45歳で東征を始めるまでここに住んだ。

(6) 神武東征に関わる神々 ⇒参照資料1-4参照

3. 大和思慕

(1) 東征への決意

読本: その中へ天の磐舟に乗ってとび降りた者がある。とび降りた者は饒速日。

- * 塩土の翁(おじ): 「東に美地(うましつち)あり。青山四周(せいざんよもにめぐれり)」と云う。
意味は、東方に青い山々に囲まれた美しい土地がある。
- * 「何れの地(ところ)に坐(いま)さば、天の下の政を平らけく聞こし看(め)さむ。なを東に行かむと
思う」。天下の政治を無事に行えるところを悩み東に向かう決意を兄に語る。

(2) 東征の準備(宮崎)

①湯之宮神社

- * イワレビコが東征の最初の宿泊地とされる神社。
 - ・座論梅: 最初の軍議を開いたとされるこの地の白梅。
 - ・隣接してイワレビコが湯あみしたと伝えられる御浴場之跡がある。

②都農町矢研ぎの滝

大和の神と協力して国造りをする思いが感じられる。参照資料1-5

- * 軍備を整えた場所
 - ・山と海の距離が近いために食物が得やすく、古代から人々が定着。
 - ・矢の材料になる矢竹が茂り、矢じりに適した石が潤沢に取れる。
- * 都農神社: 祭神は大己貴命(オオナムチノミコト)。大己貴命は出雲の大国主命若年時の名前

(3) 船出の地: 日向灘で選んだ「造船の里」(美々津港)

江戸時代は林産物の集積地とし瀬戸内海や大阪との間を行きかう千石船がひしめいていた。参照資料1-6

①美々津港

- * 大船に適した良港で船を作る木材に事欠かず、技術を持った人がいる。
 - ・宮崎県の森林面積の26%を占める耳川流域がある。
 - ・古代から船材として利用した楠が生い茂る。

- * おきよ祭、つき入れ団子

・物見番から塩も風もちょうどよいの知らせで、8月2日の予定を1日に急きょ変更する。八朔(8月1日)午前4時から始まる。・餡ともちが一緒になった団子: 参照資料1-7

②立磐神社

- * 美々津港に鎮座し、住吉3神(航海の神)を祭る
 - ・祭神: 底筒男命(そこつつおのみこと)、中筒男命(なかつつおのみこと)、表筒男命(うわつつおのみこと)、神武天皇

4. 御船出

東征へ向けての船出と九州の寄港地

(1) 水源のない島の窮状に心痛(大入島)

古事記に書く最初の寄港地「豊国の宇佐」まで3箇所足跡がある。

① 大入島(おおにゅうじま)の伝承

- * 「居立ちの神の井」で食料や水補給の後、大入島に立ち寄る。
 - ・ 場所は佐伯市米水付津(よのうづ)。食糧と水を補給したことが地名の由来。
- * 「神の井」
 - ・ 水源のない同島で住民からの窮状を聞き、イワレビコが「水よ、いでよ」と祈念。今でも清らかな水がわいている。「神の井」と命名した。

② トンド火祭り

- * イワレビコをたき火で見送った故事による。

東征が種籾と鉄器と灌漑技術の伝播を伺わせる。

(2) 海の難所 現れた水先案内人(豊予海峡)

豊予海峡(豊後水道)を助っ人に導かれ乗り超えていく物語。

・ 佐賀関関サバ、関アジで知られる。
 ・ 海峡幅は13.5kmで深層流との対流が起こる場所。
 参照資料1-8

① 速吸之門(はやすなと)

- * 大分市佐賀関と四国の佐田岬の間に作られた豊予海峡を言う。(日本書紀)
- * 助っ人珍彦(うずひこ)が現れ、「天神(あまつかみ)の子来でますと聞(うけたまを)り、故に即ち迎え奉る」と。⇒海の豪族、東征の側近的役割を果たしていく。
 - ・ イワレビコは「椎しひ根津彦(うしひねつひこ)」の名を与える。大和の国造の祖。(古事記)

② 早吸日女神社(はやすみめじんじや)の伝承

同神社の蛸断ちは千年以上も続いている。参照資料1-9

- * 神剣を差し出す大蛸
 - ・ 船団が急な風雨と荒波に遭遇する。椎根津彦が海面を除くと海底から異様な光が。
 - ・ 神剣はイザナキが絶えず佩(は)いていたもので、権現礁(ごんげんべい)で禊の最後に海底へ沈めた。
- ⇒大蛸はそれを守護し、イザナキの子孫が来たことを喜び預かっていた神剣を返した。

豊予海峡の暗礁のこと

(3)宮を造り歓待した宇佐の民(宇佐神宮)

宇佐で関係を強化していく物語。

①宇沙都比古(うさつひこ)・宇沙都比売(うさつひめ)

* 杵鼻(かじはな)の地に上陸し宇佐へ。(日本書紀)

* 宇佐の2人は足一騰宮(あしひとつあがりのみや)を造り、大御饗(おおみあえ)を献る。(古事記)

・イワレビコは喜び、家臣の天種子命^注(アマノタネコノミコト)に宇沙都比売を娶ることを進める。

(注)アマノタネコノミコトの祖父神は天児屋根命(アメノコヤネノミコト)で、天の岩戸に天照大神が隠れた際に祝詞を唱え、岩戸が開いた時に八咫鏡を差し出した。ニニギの天孫降臨での随伴者で、のちの藤原氏の神。

⇒既に、宇佐は天つ神族が居たことを表している。

②宇佐神宮の伝承

参照資料1-10

* 宇佐と大和朝廷の結びつき

・宇佐市には九州最古と言われる3世紀後半の前方後円墳(赤塚古墳)がある。

大和からもたらされた鏡や装身具などの副葬品が多数出土。

⇒赤塚古墳は宇佐と大和朝廷がかなり早くから瀬戸内海を通して大和影響下にあったとを立証している。

* 宇佐と日向との結びつき

・日向と宇佐は海路を通じてかなりの親密な交流があった。

⇒イワレビコへのもてなし、協力姿勢はイワレビコと日向が宇佐と大和に相当重要視されていた、あるいは同族の天つ神族であったことを意味する。

(4) 謎の1年。稲作で豪族が恭順(岡田宮)

イワレビコは竺紫(つくし)の岡田宮で1年間滞在する。

イワレビコの1年は稲作の技術を伝え、教える時間の可能性が大きい

参照資料1-11

①岡田宮の伝承

奈良時代初期、全国各地を収める国造は134人、県主は69人

- * 岡地方(遠賀郡)を「治めていた熊族が祖先神を祭っていた社。(古事記)」
⇒現在は、中央にイワレビコ、右殿に県主熊鰐命を祭る。
- * 元宮の一宮神社にはイワレビコが祭祀を行った祭場跡「磐境(いわさか)」が残る。
⇒熊族の地で祭祀行ったことは、既に熊族がイワレビコ(天つ神族)の従者であったということ。

②要衝の地

- * 北九州の要衝の地で抑えておかないと東征もできない地。
弥生時代には朝鮮経由の渡来人が急増する。
- * 抑える手段は稲作の技術
 - ・熊族は海を中心の生活だったから、コメの安定性を教えるイワレビコに従った。
より幸せになれると。

1粒が300粒に

(5) 熊族と阿曇氏

参照資料1-12

岡田宮の祭神の熊鰐命は熊族の祖神であり海神(わだつみ)であろう。

①海神は紀元前から古代大和が出来るまで北九州の沿岸を中心に活躍

- ・最先端の武器、操舵術、文化を有していた。
⇒北九州の沿岸部を中心として銅器、鉄器、陶磁器、古墳等の遺跡が集中する
- ・最古の倭国に対する後漢書で紀元前五十七年に贈った「漢奴倭国王の金印」の記述
⇒この年代以前に大陸との交流が活発に行われ、渡しの神と言われる船頭(海神)が居た
- ・金印は志賀島で江戸時代に発見されたがこの近くに志賀海(しかうみ)神社
祭神は上津綿津見神(うわつわたつみのかみ)、中津綿津見神、底津綿津見神の綿津見三神

海神にはもってこいの玄界灘の荒波を避ける良港の地

(5) 熊族と阿曇氏(つづき)

②阿曇(あずみ)族との関係

綿津見三神の神裔(神の子孫のこと)が阿曇(あずみ)族であると社伝に記す。

⇒一説によると奴国はこの阿曇族が持っていた国

将に北九州から文化が移動する時の海神。紀元前後？

③記紀との検証

・「綿津見神三神は伊邪那岐命が黄泉(よみ)の国から逃げ帰り、筑紫の日向の小戸の橘の櫛原(あわきはら)で禊(みそぎ)をされた時に、海の表面(上津)、中ほど(中津)、海底(底津)で綿津見三神が成った」と記す。

・綿津見神が成ったすぐ後に表筒之男神、中筒之男神、底筒之男神の住吉大社の住吉三神が成る
⇒この神裔が住吉族になる。

⇒記紀で伝えていることは阿曇族が最初に海神としてあり、その枝族として住吉族が出てきた。

神功皇后時の頃から筑紫への進出が記述される

・伊邪那岐命が目を洗った時成った神が天照大神であるから、綿津見三神と住吉三神は兄弟

・宗像三神は天照大御神と弟の須佐之男神の間の誓約(うけい)で成る

多岐都比売命(たぎつびめのみこと)、市寸島比売命(いちしまびめのみこと)、多紀理毘売命(たきりびめのみこと)の宗像三神が成る。

⇒綿津見三神と住吉三神から見れば人間界の姪に相当するから宗像族はより後に阿曇族から分岐したことを表している。

⇒熊族は北九州の文化が大和に移動する時の要になる関門海峡を占めていたのであるから、~~住吉三神と同時代に阿曇氏から分岐した一族といえる。~~

阿曇族と住吉族は対馬海峡と玄界灘などの持ち分があったかも。